

## 教員学生文化芸術交流事業 教員派遣と海外講師招聘による芸術教育の双方向的な研究

研究代表者：チャールズ・ウォーゼン 研究分担者：中嶋 泉

研究協力者：南 昌伸、鍛澤達夫、山浦めぐみ、田中圭介、バーンハード・ガーベルト（ハノーバー専科大学教授）、フリードリヒ・ヴェルトツィン（ハノーバー専科大学教授）、ウリ・ルスト（ハノーバー専科大学教授）、三瀧末雄（ミヅマアートギャラリーディレクター）、小田井真美（さっぽろ天神山アートスタジオアートディレクター）

### 研究目的

本研究は、(1)本学より芸術学部教員を欧州協定校へ派遣し、共同創作ワークショップや美術活動のレクチャーを開催することで広島および日本の文化芸術を教育的に普及し、(2)ドイツ、アメリカなど欧米各地で文化芸術の分野において国際的に活躍している海外講師を本学に招へいし、制作状況や創作環境に関するトークプログラムなどを開催することで本学学生の留学機運を高める、二つの企画からなる双方向的な教員学生文化芸術交流を通じた国際交流推進を目的とする実践的研究である。

### 欧州協定校への教員派遣によるワークショップ、レクチャー開催を通じた日本の美術教育の普及

2016年6月、ハノーバー専科大学内で、本学芸術学部の山浦めぐみ講師と田中圭介講師によるレクチャーとワークショップが開催された。ハノーバー専科大学の学生約30名が参加、プログラムを通じて日本の美術教育をもとにした各教員の芸術分野における専門性を活かした交流プログラムを行った。

日本画を専門とする山浦めぐみ講師は、日本画の代表的な基底材（和紙または板）に岩絵具等を用いて描画彩色をおこなうワークショップを開催した。草花や動物のデッサンを下絵にした日本画の制作を行なった。彫刻を専門とする田中圭介講師は、人形と身体をテーマとした彫刻制作のワークショップを開催した。情報化時代における身体観の表現、および東西の文化や生活習慣を背景とする差異の考察などを目的とした、自由な素材を用いての立体表現を試みた。

最終日には、それぞれのプログラムにおいて学生の作品プレゼンテーションと講評が行われ、後に全体での合評会が実施された。参加学生は、レクチャーの聴講やワークショップでの実制作、普段とは違った指導方法や他言語コミュニケーションを通じ、異文化交流を実践的に学ぶことができた。



図2 ワークショップの様子



図3 ワークショップの様子



図1 レクチャーの様子



図4 講評会の様子

### 欧米各地で文化芸術の分野において国際的に活躍する海外講師によるトークプログラム

2016年7月11日、日本在住のギャラリーディレクター・三浦末雄氏による、日本の独自性を主題とする展示企画やその活動を紹介する講演会を開催した。手技の冴え、完成度の高さ、繊細な審美眼など、日本ならではの美的な魅力の再発見と国内外へのアウトリーチ活動を事例報告し、近年のアジアにおける日本美術の立ち位置やこれからの可能性など、若い芸術家に向けた実践的なレクチャーとなった。



図5 トークの様子

2016年11月21日、日本在住のアートディレクター・小田井真美氏によるアートプロジェクトのディレクションを中心とする芸術支援の実践や地域連携のあり方についての講演会を開催した。芸術家による地域での滞在制作活動であるアーティスト・イン・レジデンス(AIR)について、国際的なAIR研究機関Trans Artists(アムステルダム、オランダ)での調査研究、および国内外におけるリサーチを報告した。聴講した学生は、グローバルに展開する芸術活動の可能性や必要となる現実的な能力などの知見を得ることができた。



図7 トークの様子



図6 トークの様子



図8 トークの様子